

酒に就人

萩原 朔太郎



一場

◆酒は健康に良く、「憂いを掃う玉帚」である。
◆私

酒さけというものが、人身じんしんの健康けんこうに有害ゆうがいであるか無害むがいであるか、もとより私わたしには医学いがくじょう上の批判ひはんができない。だが私自身わたしじしんの場合ばあいでいえば、たしかに疑うたがいもなく有益ゆうえきであり、いかなる他ほかの医薬いやくにもまさって、私わたしの健康けんこうを助たすけてくれた。私わたしがもし酒さけを飲のまなかったら、多分たぶんおそろく三十歳さんじっさい以前いぜんに死しんだであろう。青年時代せいねんじだいの私わたしは、非常ひじょうに神経質しんけいしつの人間にんげんであり、絶えず病的びょうてきな幻想げんそうや強迫観念きょうはくかんねんに悩なやまされていた。そのため生いきることが苦くるしくなり、不断ふだんに自殺じさつのことばかり考かんがえていた。その上生理的うえせいりてきにも病身びょうしんであり、一年いちねんの半ばなかは病床びょうしょうにいるほどだった。それが酒さけを飲のみ始めてから、次第しだいに気分きぶんが明るあかくなり、身体からだの調子ちようしもよくなって来きた。

酒さけは「憂うれいを掃はらう玉帚たまぼうし」というが、私わたしの場合ばあいなどでは、全まったくその玉帚たまぼうしのお蔭かげでばかり、今日こんにちまで生いき続つづけて来きたようなものである。神経衰弱しんけいすいじやくという病氣びょうきは、医学いがくじょう上でどういいう性質せいしつのものか知らないが、私わたしの場合ばあいの経験けいけんからいえば、たしかに酒さけによって治療ちりようされ得うる病氣びょうきである。一時的いちじてきにはもちろんのこと、それを長ながく続つづける場合ばあい、体質たいしつの根本こんぽんから医療いりようされて来くるのである。つまり飲酒いんしゅの習慣しゅうかんからして、次第しだいに神経しんけいが図太ずぶとくなり、物事ものごとに無頓着むとんちゃくになり、つまらぬことにく、よくよ、しなくなつて来くるのである。悪わるくいえば、それだけ心こころが荒すさんで来くるのであろうが、神経質しんけいしつすぎる人ひとにとっては、それでちょうど中庸ちゅうようが取とれることになつてゐるのである。

アメリカ合衆国がっしゅうこくでは、一時法律いつときほうりつによつて酒さけを禁きんじ、ために

ギャングの横行を見るに至ったが、今日の神経衰弱時代を
表象する文明人の生活で、酒なしに暮し得るということは
考えられない。一体酒を罪悪視する思想は、ヤンキイ的
ピューリタンの人道主義にもとづいてる。ところでこの
ピューリタンという奴が、元来文化的情操のデリカを知らない
粗野の精神に属している。ピューリタンの精神は、ヘレニズムの
文化に対する野蛮主義の抗争である。すべての基督教の中で、
これが最も非哲学的、非インテリ的な卑俗実用主義の宗教である。
そこで救世軍等の宗教が、いかに街頭に太鼓を鳴らし、百度
酒の害を説いたところで、文化人であるところの僕等芸術家が、
一向にそれを聴かないのは当然である。

二場

◆酒には誘惑と冒険がある。

◆私

一般にいわれるごとく、酒が性欲を高奮させるといのは嘘である。むしろ多くの場合に、酒はその反対の作用をさえも持つてゐる。この事実については、僕は自分を実験にして経験した。それはまちがいのないことである。しかしだれも知る通り、酒は制止作用を失はさせる。そのため平常克服していたところの性欲が、意志の羈絆を離れて奔放に暴れ廻る。そこで外觀上には、酒が性欲を興進させるように見えるのである。実際のことをいえば、酒を飲んだ時の性欲は、質量の点で遙か平常に劣つてゐる。その上に粗野で感覚のデリカを欠いてゐる。真の好色を楽しむ者は、決して酒を飲まないのである。

酒が意志の制止力をなくさせるという特色は、酒の万能の効能であるけれども、同時にまたそれが道徳的に非難される理由になる。実際、酔中にしたすべての行為は、破倫というほどのことでなくとも、自己嫌忌を感じさせるほどに醜劣である。酒はそれに酔つてゐる中がよいのであって、醒めてからの記憶は皆苦痛である。だが苦痛を伴わない快樂というものは一つもない。醒めてからの悔恨を恐れるほどなら、始めから酒を飲まない方がいいのである。酒を飲むということは、他の事業や投機と同じく、人生における一つの冒険的行為である。そしてまた酒への強い誘惑が、実にその冒険の面白さにも存するのだ。平常素面の意識ではできないことが、いわゆる酒の力を借りてできるところに、

飲のんだくれ共どものロマンチックな飛翔ひしょうがある。一年いちねんの生計費せいけいひを
一夜いちやの遊興ゆうきように費つかい果はたしてしまった男おとこは、泥酔でいすいから醒さめて翌日よくじつに、
生涯しょうがい決して酒さけを飲のまないことを誓ちかうであろう。その悔恨かいこんは
鞭むちのように痛々いたいたしい。だがしかし、彼かれがもし酒さけを飲のまなかったら、
生涯しょうがいそんな豪遊ごうゆうをすることもなかったろう。そして律義者りちぎものの意識いしきに
追おい使つかわれ、平凡へいほんで味気あじけのない一生いっしょうを終おわらねばならなかった。
酒さけを飲のんで失敗しっぱいするのは、始はじめからその冒険ぼうけんの中なかに意味いみをもってる。
夢ゆめとロマンスの人生じんせいを知らしないものは、酒盃しゅはいに手てを触ふれない方ほうが
いいのである。

三場

◆酒飲みは二重人格者のようなものである。 ◆私

酒飲みの共の人生は、二重人格者としての人生である。平常素面である時には、謹厳無比な徳望家である先生たちが、酔中では始末におえない好色家になり、卑猥な本能獣に変わったりする。前の人格者はデキール博士で、後の人格者はハイドである。そしてこの二人の人物は憎み合っている。デキールはハイドを殺そうとし、ハイドはデキールを殺そうとする。醒めて酔中の自己を考える時ほど、宇宙に醜悪な憎悪を感じさせるものはない。私がもし醒めている時、酔っている時の自分と道に逢ったら、唾を吐きかけるどころでなく、動物的な嫌厭と憤怒に駆られて、直ちに撲り殺してしまうであろう。この心理を巧みに映画で描いたものが、チャップリンの近作「街の灯」であった。

この映画には二人の主役人物が登場する。一人は金持ちの百万長者で、一人は乞食同様のルンペンである。百万長者の紳士は、不貞の妻に家出をされ、黄金の中に埋れながら、人生の無意義を知って怏々としている。そして自暴自棄になり、毎夜のごとく市中の酒場を飲み廻り、無茶苦茶にバカの浪費をして、自殺の場所を探している。それは人間の最も深い悲哀を知っているとこの、憑かれた悪霊のような人物だった。そこである街の深夜に、ぐでぐでに酔って死場所を探している不幸な紳士が、場末の薄暗い地下室で、チャップリンの扮している乞食ルンペンと邂逅する。ルンペンもまた紳士と同じく、但し紳士とはちがった事情によって、人生に

すっかり絶望ぜつぼうしている種類しゅるいの人間にんげんである。そこで二人ふたりはすっかり仲好なかよしになり、互たがいに「兄弟きょうだい」と呼よんで抱擁ほうようし、髯面ひげづらをつけて接吻せつぶんさえする。酔よっぱらった紳士しんしは、ルンペンを自宅じたくへ伴ともない、深夜しんやに雇人やといにんを起おこして大酒宴だいしゅえんをする。タキシードを着きた富豪ふごうの下僕げぼくや雇人等やといにんらは、乞食こじきの客人きやくじんを見みて喫驚びつくりし、主人しゅじんの制止せいしも聞きかないふりで、戸外こがいへ掴つかみ出だそうとするのである。しかし紳士しんしは有頂天うちやうてんで、一ビンひとひやく百フランもする酒さけをがぶがぶ飲のませ、おまけに自分のベッじぶんドへ無理むりに寝ねかせ、互たがいに抱擁ほうようして眠ねむるのである。

朝あさが来きて目めが醒さめた時とき、紳士しんしはすっかり正気しょうきになる。そして自分じぶんの側そばに寝ねているルンペンを見みて、不潔ふけつな憎悪ぞうおから身みぶるいする。彼はかれ 大声おおこえで下僕げぼくを呼よび、すぐに此奴こやつを戸外おもてへ掴つかみ出だせと怒鳴どなるのである。彼はかれ 自殺用じさつようのピストルをいじりながら、昨夜ゆうべの馬鹿気ばかげた行爲こういを後悔こうかいし、毒蛇どくへびのような自己嫌忌じこけんきに悩なやまされる。彼はかれ 自分じぶんに向むかって「恥知はじしらず。馬鹿ばか！ ケダモノ！」と叫さけぶのである。

けれどもまた夜よるになると、紳士しんしは大酒おおざけを飲のんでヘベレケになり、場末ばすえの暗い街々くら まちまちを徘徊はいかいして、再度ふたたびまた昨夜ゆうべの乞食ルンペンこじきに邂逅かいこうする。そこでまたすっかり感激かんげきし、「おお兄弟きょうだい」と呼よんで握手あくしゅをする。それから自動車じどうしゃに乗のせて家いえへ連れ込こみ、金庫きんこをあけて有ありったけの札束さつたばをすっかり相手あいてにやっあててしまう。だがその翌朝よくあさ、再度ふたたび平常へいじょうの紳士意識しんし いしきに帰かえった時とき、大金たいきんをもつてルンペンを見みて、この泥坊野郎奴どろぼうやろうめと罵ののるのである。そしてこの生活せいかつが、毎晩まいばん同じおなように繰返くりかえされて続つづくのである。

宿命詩人しゅくめいしじんチャップリンの意図いとしたものは、この紳士しんしによつて自己じこの半身はんしん（百万長者ひやくまんちやうじやとしてのチャップリン氏しと、その社会的名士しゃかいめいし

としての紳士生活）を表象し、他の乞食ルンペンによって、永遠に不幸な漂泊者であるところの、虚盲な悲しい芸術家としての自己を表象したのである。つまりこの映画における二人の主役人物は、共にチャップリンの半身であり、生活の鏡に映った一人二役の姿であった。しかもその一方の紳士は、自己の半身であるところのルンペンを憎悪し、不潔な動物のように嫌厭している。それでいて彼の魂が詩を思う時、彼は乞食の中に自己の真実の姿を見出し、漂泊のルンペンと抱擁して悲しむのである。

チャップリンの悲劇は深刻である。だが天才でない平凡人でも、こうした二重人格の矛盾と悲劇は常に知ってる。特に就中、酒を飲む人たちはよく知ってる。すべての酒を飲む人たちは、映画「街の灯」に現れて来る紳士である。夜になって泥酔し、女に大金をあたえて豪語する紳士は、朝になって悔恨し、自分で金をあたえた女を、まるで泥坊かのように憎むのである。酔って見知らぬ男と友人になったり、兄弟と呼んで接吻した酔漢は、朝になって百度も唾を吐いて嗽いをする。そして髪の毛をむしりながら、あらゆる嫌厭と憎悪とを、自分自身に向って痛感する。

四場

◆ 私自身の酒による失敗エピソード。 ◆ 私

すべての酒飲みたちが願うところは、酔中にしたところの
自己の行為を、翌朝になって記憶にとどめず、忘れてしまいたいという
願望である。即ちハイドがジキールにしたように、自己の一方の
人格が、他の一方の人格を抹殺して、記憶から喪失させて
しまいたいのだ。しかしこのもっともな願望は、それが実現した場合を
考える時、非常に不安で気味わるく危険である。現にかつて
私自身が、それを経験した時のことを語ろう。ある朝、寢床の中で
目醒めた時、私は左の腕が痛く、ひどくずきずきするのを感じた。
私はどこかで怪我をしたのだ。そこで昨夜の記憶を注意深く
尋ねて見たが、一切がただ茫漠として、少しも思い出す原因がない。
後になって友人に聞いたら、酔って自動車に衝突し、舗道に
倒れたというのである。もっとひどいのは、ある夜行きつけの
珈琲店に行ったら、女給が「昨夜遅くなってお帰りが困ったでしょう」
という。昨夜その店へ来た覚えがないので、私が妙に思っ
て反問すると、女給の方が喫驚して「あら！ だって昨夜来たくせに」
という。不思議に思ってたんだん聞くと、たしかに昨夜来ていたことが、
少しずつ記憶を回復して解って来た。それがはっきり解った時、
私は不思議な気味わるさから、真蒼になって震えてしまった。
今一つの例を話そう。

ある朝三越呉服店から、大きな買物包を配達して来た。家人が
出て何事か言い争ってる。家人の方では、そんな買物をした覚えが

なく、よその間ちがいだろうというのである。配達人の方では、頑として間ちがいでないことを主張している。そこで結局、僕が呼び出されることになった。だが僕も買物をした記憶がなく、家人と一緒に間ちがい説を主張した。しかもその買物は、代金先払いになってるのである。なおさらもって受取るわけに行かないのである。しかし配達人の方では、あくまで頑固に主張するので、私も少し懸念になり、だんだんよく昨夜の記憶をたぐって見ると、たしかに、やはり私がそれを買ったのだった。その晩私は酔っぱらって、夜間営業の店へ這入った。すると平常欲しがっていた品々が、明るい電気の下に陳列され、夢のように魅惑的に見えた。酒に酔っていた私は、酔人一流のパッションと無計算とで、皆それを買いたく思い、代金先払いにして自宅へ届けさせたのだった。そしてしかも、翌日すっかり忘れていたのだ。こうした記憶の喪失ほど、不安で気味のわるいものはない。なぜならある時間内における自己の行為が、一切不明に失喪して、神かくしになってしまふからである。昨夜の自己がどこで何をしていたか、どこを歩き廻り、何を行動していたかということが、自分で解らない時の気味わるさは、言語にいえない種類のものだ。夢遊病にかかった人は、自己の行為に対して記憶を持たず、病気が治った後で、その過去の生活と、その半身の自己とをすっかり忘れてしまつてゐる。ウィリアム・ゼームスの心理学書には、こうした夢遊病者と人格分裂者の実例がたくさん出てゐる。ある患者等は、病氣中の自己をB氏という他人名で呼び、自分とすっかり別の人物として語っている。しかもそれを批判し、

罵倒し、その生活について客観的の見方をしてゐる。すべての酒飲み人種は、一時的の夢遊病者であり、人格分裂者であるのだ。

シャルル・ボードレエルは、酒と阿片とアシッシュについて、その薬物学的比較観察をした後で、酒がいちばん健全であり、毒物的危険性がない上に、意志を強くするといつて推奨している。阿片やアシッシュに比べれば、酒はたしかに生理的であり、神仙と共に太初から有ったところの、自然の天与した飲物である。猿のような動物でさえも、自らかもし酒を飲むのだ。中国人が酒の精を猩々に象徴し、自然と共に悠遊する神仙の目出度さに例えたのは、まことに中国人らしく老荘風の思想である。この「酒の目出度さ」という思想が、キリスト教の西洋人には解らない。そこで彼等のピューリタン等は、酒を悪魔のように憎悪するのだ。酒の宗教的神聖の意味を知ってるのは、世界で中国人と日本人としかないであろう。

〈完〉

Podcast ののラジオ 好評配信中！



視聴・購読はこちらから
<https://gekidannono.com>

ご意見・ご感想はこちらへ
radio@gekidannono.com

劇団ののでは、名作文学を声に出して演技し、収録した音声を Web 上で配信しています。複数名で読むラジオドラマタイプ、単独で読む朗読タイプなど、様々な形で朗読をしています。

みなさんも一緒に朗読を体験して楽しんでいただけるよう、本文に出てくる言葉や物語の解説も、公式サイト上で公開しています。

いつか国語の教科書で読んだ気がする、芥川龍之介・宮沢賢治・夢野久作などのあの作品やこの作品、ぜひ、役者の声でお楽しみください。

劇団ののと読む名作文学 萩原朔太郎 『酒に就いて』 Podcast 版

発行日 令和 7 年 6 月 14 日

著 者 萩原朔太郎

編 集 劇団のの

発 行 劇団のの

[https://gekidannono.com/
radio@gekidannono.com](https://gekidannono.com/radio@gekidannono.com)

※本文は、青空文庫様掲載の原文を加工したものです。
旧仮名遣いを現代仮名遣いに、旧字を新字に直しています。
ゴシック体のルビは、原文に振られていたものです。

底 本 『萩原朔太郎全集 第九巻』筑摩書房（1976 年）

初 出 昭和 11（1936）年

図書カード URL

<https://www.aozora.gr.jp/cards/000067/card60155.html>

